

哉東武え上り藤介先生諱高基に従ひ武教全書一部且城築秘事七條侍用武功秘事四條並大星傳三重傳其他附屬の書數部迄傳り歸り藩中にて其傳を廣め候由爾後箕裘の業追々精研仕べく之處不幸にして早世打續き僅々百年の間世次七八をも經報本之禮曠して豺獺に愧るのみならず流儀授受も書のみ残り何共無覺束殊に矩方甫六歳にて父を喪ひ父執之行なる流儀に老たる人に便り相學候得とも稟性陋劣不才未得其要領間臆度あるも徴を取る所無之是に於て執事之門下に遊び大に本源を究度存付候固其任に堪ざるながらも本分の職逃るゝに所なく遠く元祖の業を繼度微志に候間伏祈執事藤介先生之意に體認被爲在下學矩方如きもの忝も其道を親むべからしめ給は、矩方感佩如何ぞ哉伏て下情を左右に布く

吉田矩方頓首再拜敬白

山鹿萬介先生

執事

是れは代々萬助と云ひます。高基の先祖は千助と云ひましたが千助が後に萬助と變りました。そこで吉田松陰が願書を出して入門を許された時の血判をしてある起請文が大學の方に來て居ります。其寫が此處にありますから是れも讀んで見ませう。

起請文前書之事

- 一山本勘介流兵學並城築繩張一切御相傳之趣他言仕間敷候事
- 附御傳書以他筆寫候者以誓詞可申付候事
- 一右之通公用之節於戰場者可爲格別候事
- 一兵法御相傳相極雖爲御免許以後先師御相傳之趣令違背立自流申間敷候並大事秘事御相傳之儀雖爲相弟子其品御傳授無之方え者申談間敷候事

附及末期候者御傳書等可致進候其段難叶候者燒失可申候事
右之趣於相背者

日本國中大小神祇摩利支尊天八幡宮並自分崇敬之神罰可罷蒙者

也仍而起請文如件

嘉永三庚戌年九月廿二日

吉田大次郎

矩方花押

山鹿萬助殿

斯う云ふ嚴しい誓を立て、始めて此平戸に居る高基の子孫山鹿巖泉の家に入門をしました。それで松陰は二重に山鹿流の系統に接して居る次第であります。即ち江戸に於ては素水の塾に入り、平戸に於ては巖泉の塾に入つて居ります。斯様に東西兩方の系統を引いて居ります。實は此處に系圖を持つて來て居りますけれども、讀む間があまりませぬが高基の子孫の系圖は今日迄のがあります。素行から今の山鹿高三氏に至るまで丁度十三代になります。松陰は曾て佐久間象山に學んだことがあります。素行の關係の方が一層多いやうであります。松陰の書いた本を見ますると佐久間象山のことを吾師と云ひ、素行のことを先師と云ふて居ります。松陰は『武教講録』と云ふ書物を

著して居りますが、之れを見ると素行の『武教小學』の講義であります。彼の萩の松下村塾には今に素行の書物が色々遺つて居ります。山鹿流の學問を講ずることを許されて松陰が松下村塾で教へたのが僅に二年半程であります。此松下村塾の教育が明治の文明に大關係を及ぼすことになつて來たのであります。所が其の學問の因て來たるところを考へて見ますると云ふと素行に淵源して居るのであります。そこで素行の學問の系統は、一方に於ては大石良雄の如き人物を経て、赤穂の義士の事件となつて徳川時代の人心に深大なる影響を及ぼし、一方に於ては吉田松陰の如き人物を経て遠く明治の新文明に影響する所があつて、ナカ／＼其關係の廣く且つ大なるところが見えるのであります。

そこで此素行の學問を研究するに當つて感ずるところは、素行は當時の學者が支那にかぶれて支那を専ら崇拜して居る時に、それだけではいかぬ。日本民族として自主獨立の精神が無くてはならぬと云ふ

ので、それを土臺にして色々書き著はして來ましたが、其著述と云ふものはナカノ澤山あります。私が先年素行の著述の卷數を算へて見ました、凡そ六百卷程ありました。ところが其後段々平戸の方から出て來る書物が何卷かあるので、實は六百卷以上になるのであります。さうして内容は、随分多方面に亘つて居ります。或物は純然たる歴史に關係がある。或物は神道、或物は兵學、或物は武士道、或物は經學に關係がある。私は兵學の方は分りませぬから、乃木大將などに尋ねて見ましたところが、兵學に於てもナカノ、良い所があると云ふことを承りました。武士道の側などに於ては、確に良いものがあります。

今日此祭典に當つて感ずるところは、さう云ふ良い物の傳つて居るのを空しくしないで、矢張り研究して西洋の良い物と調和して往つたならば、其効果は偉大であらうと思ひます。當時の學問の良い所は、矢張り神儒佛の學問の神髓を採りて、打つて一丸となして、出て來たところにある。此武士道と云ふものは、矢張り神儒佛に關係があります。

神道を離れては武士道を説くことが出來ない。それから佛教は重に禪です。禪に限らぬけれ共禪に最も關係して居ります。それから儒教の關係が大變あります。武士道は神儒佛に大に關係して居るのであります。中には武士道を説く人に神道を主として説く人がある、又儒教を主として説く人がある。又禪を主として説く人がある。彼の山岡鐵舟翁並に其一派の人などは、禪を主として説いて居ります。色々になつて居りますが、先づ神儒佛の良いところが調和して、武士道の教義の基礎を成して居ります。それに似た事が他方面にもあります。例へば二宮尊徳翁の説いた農業の教も、矢張り神儒佛の三教が基礎となつて、一種の農業道が出來たのである。ナカノ棄てられぬ所があります。又此商業道も神儒佛の教を基礎として説いたのが、徳川時代の末に行はれた。即ち心學道話であります。武士道の側は矢張り其時まで得られるだけ神儒佛の教の粹を採つて出來たのであります、其中には日本民族の一貫したる精神があつて、之を基礎として之が營養分

として神儒佛の粹を抜いて來たのであります。日本の根本的精神を無くなせば武士道は無い。一體日本民族の發達上から考へて見れば、其他民族と違ふ點は其處にあるのである。神功皇后の時代には文字と云ふものはまだ無かつた。けれども三韓を征伐するに足る丈の武勇があつてナカク盛んであつた。應仁帝の時から支那の文明が入り、欽明帝の時から印度文明が入つて來て、營養分となつて、日本民族の精神的發展を裨補したのであります。然るに維新以後に至つて更に之に加ふるに西洋の思想を以てして、一層大なる營養分を採つて發展して來たのであります。其發展すべき土臺は何かと云へば、日本民族の精神であります。縦令外國の色々な文明の利器を利用して、それを運用する精神は日本民族の精神でなくてはならぬ。如何程立派な器械があつてもそれを支那人に持たせたならば大した事も出來ない。日本民族の偉大なる發展を爲す基礎は、日本民族の貫いて來た數千年來の精神にあるのである。それが偉大なる發展をしやうと云ふ

には有らゆる營養分を採つて來なければならぬ。維新以前には神儒佛の營養分を採つて來たけれども、維新以來は西洋文明の營養分を採つて來た。それを運用するものは我々日本民族の精神である。自主獨立の民族的精神が無ければならぬ。ところが明治以來社會現象の複雑なる動もすればそれを忘れる傾があります。此時に當つて山鹿素行先生を祭ると云ふことは大に意味の有ること、又此意味を忘れてはならぬと考へます。(明治四十一年贈位先哲祝典大會講演)

第三 山鹿素行先生と乃木大將

今日は例年の如くに山鹿素行先生の丁度命日に當りますからして、法會を營むことになつて居りました、實は大抵この二十六日には乃木大將も御見えになりましたのでありますが、本年は斯う云ふことになりまして、暫くの間に甚しき變化を感ずるやうな次第であります。實はさう云ふことでありましたから、素行先生の法會を營むと同時に乃木大將の追悼會を兼ねると云ふことになりました、今日斯う云ふ會が開かれました。この雨天に拘らず、殊に途の非常に悪いのに拘らず、多人数御出になりましたことは深く感謝を致す所であります。就きましては、此の素行會のことでありますからして、素行會の起つて來たこと竝に乃木大將の素行先生の學問に關係のありました點を少し御話して置くことは無駄でなからうと思ひます。尤も素行會の方々は、斯う云ふことはよく御存じでありますけれども、今日初めて御見えに

になつた方も随分多人数であらうと思ひますから、少しく是れまでの關係を御話して、さうして乃木大將に對する所感を述べるが順序であらうと思ひます。

一體素行先生の法會を營むのは明治三十九年の六月六日が初めてあります。どうして其の時法會を營みましたかと云ふと、先刻御見えになつて居りましたが唯今御歸りになりました柳谷謙太郎と云ふ方が、豫て私の著しました「日本古學派之哲學」を讀んで山鹿素行が武士道の發展に多大の貢獻をなしたことを感じて居られましたから、日露戰爭後私の所に斯う云ふことを申込まれました。日露戰爭は非常な大戰争でありましたけれども、幸にして日本が勝利を得ました。是れには固より色々な原因があることであつて、明治天皇の御稜威並に出征軍人の目覺ましき働等が直接の原因でありますけれども、徳川時代以來傳つて來て居つた武士道の精神と云ふものも此の戰勝には多大の關係が有るであらう。是れは内外人も等しく認むる所であります。

尤も武士道は何も徳川時代に始めて起つたものではない、建國以來次第に發展して來たものであります。併ながら徳川時代に至つて武士道が始めて教育的となつた。それを始めて本統に教育的にして、多く著述などをして世に擴げるやうに基礎を築上げたのは山鹿素行先生であります。柳谷謙太郎さんが此の武士道の精神の今日まで旺盛であること云ふのは随分山鹿素行先生の力の與つて居ることであらう。所が山鹿素行先生の墓は宗參寺即ち此の寺の裏にあります。ソコで自ら子孫の方々も一向其の墓に御參りにならんやうである。ソコで自ら資を投じて此の宗參寺に於て素行先生の爲に法會を營みたいから賛成して呉れと云ふことであつたから、私もそれは大變善いことでありますから無論賛成をします。どうか一つ始めたいものでありますと言つて段々話が進みまして法會を營むことになりましたのであります。就きましたは私は豫々野村子爵と乃木大將が山鹿素行先生に對しては尊敬の念を懷いて居られたことを知つて居りましたから、そ

れを兩君にもどうかして知らせたいものである、何とかして知らせたならば此兩君は必ず賛成なさると思ふから知らせることにしたいと申しますと、柳谷さんは直接兩君を知らぬと云ふことであります。其の後私からでは無かつたのであります、他の方面から此の兩君に知らせまして、兩君も大いに賛成されました。それから其の素行先生を豫々尊信して居られる方も一緒になりました。明治三十九年六月六日に此の寺に於いて山鹿素行先生の爲に法會を營み、一同墓前に參拜を致したのであります。所が其の時は此處に見えた方々は誰々であつたか、一々記憶しませぬが故子爵野村靖君は確に見えて居りました。それから故稻垣滿次郎君も見えて居りました。それから其の朝早く乃木大將は單騎山鹿素行先生の墓に詣られたと云ふことを聞きました。それで法會の時は見え無かつたのであります。其の他どう云ふ方々が御出であつたか記憶に存しませぬが、何でも數十人此處に集りまして法會を營んで無事に終りました。それから同じ三十九

年の九月二十六日に法會を営みました。それは同じ年でありませけれども、九月二十六日は素行先生の命日に當るから其の日を擇んで、明治三十九年から毎年法會を營むことを始めたのであります。其時、誰々が御見えになつたか、どうもはつきり覚えませぬが、多分乃木大將は御見えになつたであらうと思ひます。乃木大將は公務上か何か餘儀ない御差支でも無ければ、法會を營む際には大抵列席されました。故野村子爵も大抵列席されました。兩君共なか／＼御熱心でありましたことは素行會の人々の能く御存じのことでありませす。それから其の翌年に至つて素行先生の著書だとか、遺物だとか云ふものを約十種ばかり天覽に供したことがありませす。さうして又其の後素行先生に御贈位の御沙汰がありませして、正四位に御贈位になりました。それから其の後明治四十一年十二月に至つて素行會が愈々組織されませして、松浦伯爵が會長になられませした。是れは山鹿素行先生の實子の山鹿藤助を初めとして藤助の子孫が松浦家に仕へませした爲に、其の緣故

を以て松浦伯爵に會頭を御願を申して素行會が組織されませした次第であります。それから素行會は段々此の素行先生の著書を出版しませして、さうして此の武士道の精神を社會に普及させようと云ふのであります。是れまで出版した書籍の數はまだ僅かでありませすけれども、既に『山鹿語類』だの『孫子諺義』など、云ふものが出版になつて居りませす。『孫子諺義』のことも一寸御話して置いた方が宜からうと思ひませす。孫子の註は古來澤山あるのであります。けれども大抵世の儒者の註解でありませして、孫子の文意を了解するにはそれで澤山でありますけれども、孫子は兵法の書でありますから、兵學者が兵學者の眼を以て、之を註解することが必要であります。所が山鹿素行先生は兵學者である。丁度此の孫子の註解をするに適した人であります。所が此の『孫子諺義』なる山鹿素行先生の著書は是れまで寫本で傳つて居りませして、一向世間に知られて居らなかつたのであります。山鹿流の學問をする人には知られて居つたらうが、どうも一般には殆ど埋沒されたやうな事

になつて傳つて來て居ります。それに乃木大將も題字を書かれて出版になつて居ります。尤も吉田松陰も『孫評子註』と云ふのがあります。是れは從來版本があることはあつたけれども、乃木大將が松陰筆蹟の原本を其儘石版にされました。是れも大層珍しい本であります。但し『孫子評註』の方は賣本にはない。『孫子評註』は素行會にて出版したものであるが今は素行會の許可を得て民友社より再版して廣く販賣して居ります。さう云ふ風に素行會は素行先生の著書を出版することになつて居ります。是れから次第に出版しようと云ふ計畫であります。何分素行先生の著書の數は非常に多うございます。是れまで印刷になつたものは十の一位でありませう。曾て印刷になつたものは徳川氏の時に滅版されて仕舞つた。『聖教要録』などは一旦版にされたが絶版された。『中朝事實』も多分滅版されたのでありませう。是れも多くは寫本で傳つて居つて、立派な版本は傳らぬ。全く傳はらぬことはないが、僅かほか無いものであります。今は乃木大將の版にされた

のもあり、其の外にもあるが、長らく寫本で傳へられた。さう云ふ譯であります。版本が誠に少い。さうして善い著述はまだ外に幾らもありませんから、素行會はそれ等を次第に版にしようと云ふ目的を持つて居ります。乃木大將は故野村子爵と同じく、素行會には非常に同情を寄せて居られましたから、毎回大抵出席されたのであります。それから素行會を離れても、乃木大將がどれほど素行先生の學術に對して興味を抱いて居られたかと云ふことは、多少私の知つて居る所でありませう。諸君の御參考までに御話して置かうと思ひます。是れは少しく私の事に涉る嫌ひもありますけれども、御話しませぬと分かりませぬが、抑も始めて私が乃木大將と知合になりましたのは、やはり山鹿素行先生のことからであります。それは明治三十四年の春であつたかと思ひます。月は忘れましたが、確に明治三十四年の事であります。乃木大將は突然吉田庫三君と共に私の宅に訪問されました。さうして御禮に上りましたと云ふことを言はれました。所が御禮に上りま

したと云ふのは何の爲であるか一向分かりませぬから、段々御話をし
て居りました所が事情が分かりました。それは丁度明治三十四年に
中央幼年學校からして、私に武士道のことについて一場の講演をして
呉れと云ふ御依頼がありました。それからして私は豫て少しく調べ
て居ることがありましたから承諾を致しまして、中央幼年學校に行つ
て講演を致しました。所が速記者がそれをすつかり速記をして居り
まして、後でそれを版にして差支へないかと云ふことでありましたが
ら、一向差支へありませんと申しましたので、兵事雜誌社から『武士道』と
題してそれを出版したのであります。どうも乃木大將はそれを御讀
みになつたものと察せらるゝのであります。其の『武士道』の講演の中
には武士道全體の事が論じてありますけれども、殊に山鹿素行先生の
ことを大いに力説いたしました。且つ吉田松陰が其の系統の人で、幕末
に大いに此の士氣を鼓舞されたことを述べて置きました。ソこで乃
木大將が吉田松陰の後繼者となつて居らるゝ吉田庫三君を連れて見

えました。さうして是れが松陰の後繼者である吉田庫三であると言
つて紹介された。其の意味を考へて見ると、私が山鹿素行先生のこと
を紹介し且つ吉田松陰の山鹿素行に關係のあることを申しましたか
らして其御禮に見えたのであります。一體乃木大將は非常な謙遜な
方でありまして、普通の者ならば我々の所に御禮などに見えることは
決して無からうと思ふのであります。所が其の山鹿素行先生並に吉
田松陰のことを紹介したと云ふことを深く感ぜられたと見えて、態々
御禮に見えました。其所で初めて知合ひになりました。乃木大將の
御考が平生どう云ふ所にあつたかと云ふことは、私は屢々大將と學問上
の話をしましたから略知つて居る積りであります。私より精しい方
があるか知らぬが、私は其の機會が多かつた。私は乃木大將が學
習院長にならるゝ前からして學習院の方に毎週一回程參いることに
なつて居りました。學習院の男子の方は抑も修身科の設けられて以
來今日まで行つて居ります。女學部の方は専修科が設けられて以來

専修科の方に毎週一回講話をする爲に參つて居ります。そこで學習院の方に毎週一回参りますからして、参りますれば必ず乃木大將と會ふ。私が講義をしますときは乃木大將は必ず教場に立つて居られます。二時間講義をした時は二時間始終教場に立つて居られました。それで其の講義をします前と終りには話が始終あります。講義が終りますれば直ぐ女學部の方に参りますから餘り話すること出来ませぬが、其の前には必ず豫定の時間より十分なり十五分なり早く参りますから、早ければ早い程其の間何時でも話をして居ります。其の事柄は教育のことか學問のことかであります。それで機會が多かつたのでありますから乃木大將の御考が斯云ふ所にあつたと云ふ晩年精神上の傾向に付いては聊か了解して居る積りであります。それに私は折々乃木大將の御参考になるやうな書物を見せました。すると乃木大將は必ず私の所に御自身で書物を返へしに御出でになる。書生も居たやうでありましたが、決してさう云ふ者を御寄越しに

なりませぬ。馬に乗つて副官を連れて御自身で書物を御返へしになる。人力車にて御出でになつたこともありましたけれども、大抵は騎馬でありました。さうすると又お歸りに何か書物をお貸し申すこともありました。多くは日本の武士道の書物か、國體の書物か、神道の書物か、さう云ふ書物が御好でありましたから、主にさう云ふ書物を御貸し申した。さう云ふ場合には餘りお氣に入らぬ書物は黙つて御返へしになる。餘程面白く感ぜられたのは多少批評を加へて意見を御述べになることがありました。それで乃木大將の考は斯う云ふ所にあつたと云ふことが大分分かるのであります。どうも乃木大將は是れと云ふ纏つた著述は無いやうであります。新聞には國民の元氣精華と云ふものが一部あると云ふことでありますが、どうも本統で無いらしい。又世間で『乃木大將修養訓』と題した書物を發行した者があつて新聞に其廣告が出て居りましたから、あれは貴方の著述でありますかと云つて尋ねた所が、然うでない、實はあれは非常に迷惑して居る。或る

人が自分の話や何か新聞雑誌に現はれたものを集めて来て見て呉れと言つたから、見た所が自分の考でも何でもないものが大分出て居る。さう云ふものは消して返へしてやつた。所があゝ云ふ廣告が出て居る。と云つて大いに迷惑されて居つたのである。それで「乃木大將修養訓」には乃木大將の話が這入つて居るには相違ないが、大將自身に編纂されたものでない。自身で編纂された著述は何もないであらうと思ふ。どうも纏つた著述はないけれども、併し自分の意に適した古人の書物を印刷されました。それが著述に代る。乃木大將は自分で經費を出して、さう云ふ書物を或は活版にしたり、或は石版にしたりして知友に寄贈されました。それが何百部であつたか部数は分りませぬ。是れはもう今日では貴い本で、後世「乃木本」と稱して人が尊重するに相違ない。所が其「乃木本」が已に坊間に賣本になつて居るのであつて、或人がそれを買つて來ました。乃木大將が誰某に進呈すると云ふ字がちやんと書いてある。どうも乃木大將がさう大事に印刷にして贈ら

れたのを古本屋に賣つたと云ふのは宜しくない。名が分かつて居りますけれども申しますまい。其の爲に餘り人を傷付けてはなりません。ぬが甚だ宜しくないことである。さう云ふ古本は貴い。「乃木本」として是れから先は餘程人が尊重するに相違ない。中には斯う云ふのがある。乃木大將御自身にすつかり寫してそれを石版にしてある。それは三宅觀瀾の『中興鑑言』である。初め『中興鑑言』を見せたら非常に喜ばれて、又他の方から異本を借りてそれと對照して研究されたところが、私の本には跋がない、外の本には跋があるから、其の跋を添へて自分ですつかり寫して石版にして、其の終りに源希典手づから寫すと書いてある。希典と音で讀むのでない。或る時貴方の御名は何と言ふのですかと聞くと、希典と仰つた。私は確に聞いて居ります。新聞にはよく「キテン」と書いてあるがあれは直接乃木大將から聞いたのでありますから確かであります。それで御承知でありませうが、乃木大將の書は謹嚴な文字であるから、是れは實に貴い本である。『中興鑑言』は國

體を論じた書物であつて、栗山潜鋒の『保建大記』と相並んで水戸の國體の書として大事な書物でありますが、栗山潜鋒の『保建大記』は既に御存じで其の前に御讀になつたことがある。それで私は見せませぬが『中興鑑言』の方を見せました所がそれが餘程お氣に入りました。私が或る時『中興鑑言』は餘り面白くないと冷評した所が、ナニさうでない、『中興鑑言』は斯う云ふ所が善いと言つて論じて居られました。其外乃木大將が自分で寫して版になされたのは、彼の『中朝事實』の跋文附録であります。『中朝事實』は固より誰れも能く知つて居るが、それに跋文附録と云ふ者のあることを知らなかつた。所が數年前平戸の方から跋文附録が來たので、始めてさう云ふ本のあることを知りました。乃木大將は手づからそれを寫して、石版刷にして知友に配ばられました。本文の『中朝事實』は立派な活版であります。活版にされて、知友に寄贈されましたが、貰つた人がどうも餘り讀まなかつたやうである。それで此の方は旨く行かぬと云つて居られた。『中朝事實』は漢文で無點で句讀

も何も切つてない。今の人は能う讀切らぬものであるから貰つても置いた切りで讀まない。漢學の素養のある者ならばそれで讀みますけれども、今の人は漢學の素養が乏しいから、折角貰つても讀めないから放つて置く。それでどうも困ると言つて零ぼして居られたのを聞いて居ります。併し是れも大變貴い本であります。元來此の『中朝事實』は山鹿素行先生の著述の中でも大事な書物で、乃木大將の金科玉條であります。それで新聞を讀みますと乃木大將の亡くなられます三日前、即ち九月十日に皇太子殿下に、自分で版にされた『中朝事實』を献上されたと云ふことが見えて居ります。是れは我が乃木大將の平素の考を知つて居る者から見れば、さうあるべきであると思ふ。是れは大なる國體及び政治の要領を説いた書物であります。一體『中朝事實』は標題からして當時の他の儒者と考が違つて居る。千萬群儒と大いに見解を異にした標題である。中朝とは日本のことを申します。其の頃の儒者は支那のことを中國、中華と云ふやうなことを申して居つた。

けれども山鹿素行先生の考ではそれはいかぬ。支那人が支那のことを中國、中華と言ふならば聞えるが、日本人が支那を中國、中華と云ふのは聞えない、日本人に取つては日本が中華、中國である。その序文にもさう論じてある。中朝は中華、中國と云ふのと同じで日本のことを申したのであります。日本の神代からの國體及び國體を基礎とした政治の大要を論じた書物でありまして山鹿素行先生の著述中白眉である。外にも善い著述がありますけれども、文字の整頓し、義理の徹底した點から見れば、立派な著述と言つて差支ない。固より今日になりますれば國法學であるとか、行政學であるとか、社會學であるとか色々新しい學術の立場から國體だの政治のことは講究されるのでありますけれども、當時の書物としてはなかく立派な書物であります。それで乃木大將は『中朝事實』の外『武教小學』と『武教本論』を活版にされました。是れは一緒になつて居ります。嘗て素行自筆の『配所殘筆』が平戸の方から來ました所が乃木大將がそれをスツカリ石版にされました。

夫から其の外吉田松陰の著述の中では『武教講録』を活版にされました。是れは『武教小學』の講義であります。是れは武士道の研究上なかく大事なものであります。さう云ふやうな本をまだ二三其の外に版にされました。例へば松代藩の長谷川昭道の著はした『九經談總論評説』と云ふのを活版にされました。標題丈けでは何だか經學の事を論じたやうであります。實は大いに國體のことを論じてあるから之を活版にして知友に配ばられました。それから紀維貞の『國基』と云ふものを活版にされました。是れは私が見せました。内に版本がありましたから、或る時乃木大將に見せました所が大に氣に入りました。是れは元と京都に學習院の出來たときに紀維貞が漢文で書いたもので、此の本は國體のことを論じたものであります。是れも活版にして知友に配ばられました。且つ『國基題詠集』と云ふものを何處からか探し出された。『國基題詠集』と云ふのは、國基と云ふ著述に付いて色々批評した歌、詩などが澤山あります。それ等を集めて一冊にして『國基題詠

集』と云ふのであります。それを乃木大將が斯う云ふ本があると言つて御見せになつたことがあります。それから又斯う云ふことがあります。乃木大將は一昨年でありましたか耳の病氣を爲されて數ヶ月間赤十字病院に入院されて静養された。其の後御承知の通り英國の戴冠式に赴かれた。それから御歸朝になりましたけれども、病後は私も餘り色々書見を爲さつてはどうかと思つて書物をお貸し申すことを控目にしました。所が近來は壯健になられたやうでありましたからもう宜からうと思つて安積澹泊の『大日本史論贊』と云ふ本を見せました。私の宅にありましたのは寫本でありましたが、それを見せた所が大變氣に入りました。段々それを研究されて、他の方面から又異本を借りて較べて、幾らか違つた所もあると云ふ御話もありました。それから是れは版にしたいと思ふと云ふ御話でありましたからそれは宜しうございませうと言つて賛成しました。是れは版に爲さる計畫でつたらしい。大分進んで居りましたが、今回の如きことがあつて、そ

れはとう／＼版にならずして終りましたけれども、今少し存命でありましたならば必ず版に爲されたであらうと思ふ。さう云ふ譯けでありまして、色々山鹿素行、吉田松陰、其他水戸の學者などの著書中で自分の氣に入つたものを、自ら資を投じて版にして知友に配ばられました。是等は著書ではないが、著書に代る。是等の書物を見れば乃木大將の御考がどう云ふ所にあつたかと云ふことが略々解かるのであります。乃木大將も故野村子爵も熱心なる吉田松陰の崇拜者であつた。野村子爵は松下村塾に居つて直接學んだ人でありましたから松陰崇拜者であるの言ふまでもない。乃木大將は直接松陰に御學びにはならなかつた。或る新聞には乃木大將が直接松陰に學ばれた様に書いてあるが、私は乃木大將から聞きました。松陰に御學びになりましたかと聞くと、直接には習らはぬ。玉木文之進から習つたと仰つた。乃木大將の若い時のことは存じませぬが、今度色々新聞に若い時のことが出て居るが、十八歳の時に玉木文之進の所に預けられた。さうして

玉木文之進に就いて御學びになつたと云ふことが見えて居る。直接聞いたことゝ合つて居る。玉木文之進は松陰の伯父であつて、やはり學者であります。さうして山鹿素行を崇拜して居た。今度新聞に精しいことを話して居る人があるが、乃木大將の父に當る方、乃木十郎希次も山鹿素行崇拜であつたと云ふことが出て居る。果してさうであつたとすれば、乃木大將が山鹿素行先生に對する尊信の念を起されたと云ふのは、其の父に當れる方からも來て居るし、先生になられた玉木文之進からも來て居る。又最も尊信された吉田松陰からも來て居る。どうも色々な方面に此の關係がある。それで松下村塾に於いて松陰に直接學ばれなかつたのでありますけれども、其乃木大將は多大に松陰の感化を受けて居られたことは疑はれぬ。總て精神的の方面に於いては、素行先生と吉田松陰の感化が多大である。さうして乃木大將の最後は松陰の最後と稍、髣髴たる所がある。勿論仕方は違ふが、やはり何處やら類似した點が確に見えて居ります。豫て吉田松陰を非常に尊

崇して居られたことは、數年前吉田松陰の五十年祭を東京高等商業學校に於いて營んだことがある。是れは江木千之君から私に眞先に御話がありました。吉田松陰歿後五十年に當るから何とか東京に於いて祭典を營みたいと云ふことでありますから、私が帝國教育會長の、辻新次男に帝國教育會で催ふしたら何うですかと申しました處、辻男も承諾されました。到頭彼處で松陰先生の五十年祭を營むことになりました。其時數人代るゝ松陰のことに付いて演説を致しました。所が斯かる場合でありますから是非乃木大將に一場の演説をなさるゝやうにお願致しましたが、演説は嫌ひである。乃木大將は公開の講演をなされたことは殆ど無からう。非常に嫌ひであつた。併し吉田松陰の五十年祭であるから出席すると云ふことになりまして、演壇に御立ちになつたが、松陰の士規七則を朗讀なされて、後で數言附加へられたのみである。一體松陰の士規七則は餘程よく出來て居る。其の頃の人の座右銘として實に立派な者と思ひますが、乃木大將は五十年

祭の時に斯う云ふことを御話になりました。實は自分は松陰自筆の士規七則を所持して居つたので、平生肌身を離さずそれを持つて居つた。所が惜しいことには、十年の戦争中に失つた。惜しいことをした。それで其後は自分で寫して今でもそれを大事にして居ると云ふことでありました。それで吉田松陰の一體の教訓並に行動は乃木大將の餘程手本と爲された所でありますが、士規七則の如きは最も大事に爲されて、肌身を離さずお守のやうにして持つて居ると云ふ趣意を其時に述べられた。さう云ふ次第であります。松陰のことに付いては折々話をした事があります。松陰の書物はなか／＼よく読んで居られましたやうに思ひます。それから此の吉田松陰を尊信しますれば必ず山鹿素行を尊信する。何故かならば吉田松陰の學問は山鹿素行に淵源して居る。松下村塾に行つて見ますと、彼處にちやんと文庫が出来て居りまして、吉田松陰の著書及び手澤本は大抵皆其處に陳列してあるが、山鹿素行の著述もあります。殊に松陰が素行の著書に手を入

れたものが其所に置いてある。吉田松陰と山鹿素行の關係は非常に親密なものである。是れは間接でありますけれども直接素行に就いて學ばれたも同様である。山鹿素行の實子を藤助と申しますが、山鹿藤助の門人に吉田松陰の祖先があつた。一體山鹿流では三重傳と云ふことがあつて兵學の極意は三人以上に傳へることはならぬと云ふことになつて居つた。素行の三重傳に與つた一人は素行の實子の藤助であります。山鹿藤助の三重傳に與つた一人は吉田松陰の祖先、吉田友之允重矩であります。それから段々引續いて吉田松陰まで行つて居る。それで吉田松陰の祖先が山鹿流の學問をした。吉田松陰は始終家學と云ふことを言つて居る。家學と云ふのは山鹿素行の學問のことです。『武教講録』などの中に先師と書いてあるのは山鹿素行のことです。時々、吾師と云ふこともあります。是れは佐久間象山のことです。吉田松陰は尙ほ其の時代に於て江戸に來ては山鹿素水の塾に入つて兵學を研究された。又平戸に行きまし

ては山鹿藤助の子孫の山鹿巖泉と云ふ人に就いて兵學を修められた。吉田松陰の家學が當に山鹿流であつたと云ふに止まらず、東に來ては山鹿素水の塾に入り、西に行つては山鹿巖泉の塾に入り、有らんに限りの手段を盡して山鹿流の學問を修められた。それで松陰の學は廻れば必ず山鹿素行の學問となる。それでありませうから、乃木大將は吉田松陰崇拜であると同時に素行崇拜でありました。素行會には是非御出にならんければならぬ。素行先生の法會を營むに當つては餘程の差支が無ければ必ず列席された譯であります。さう云ふ譯でありまして、精神上の系統が大事である。精神上の系統を能く見れば分るが、唯、結果だけを見たのでは分らぬ。結果は必ず原因があつて起る。其の因て來る所を探ぐらんければならぬ。教育なんと云ふものは結果が直ぐ現はれるものでない。精神上のことでもありますから何年か経つと必ず何處かに影響する。素行先生にはなか／＼多勢の門人がありました。其の教育の結果は次第に現はれて來た。赤穂の義士の

働なども段々推して行けば山鹿素行の影響であります。是れも直ぐではない。二十八年以上を隔つて起りました。精神上のことは系統があつて何時かは其結果を見る。種を蒔いて置けば何時かは實を結ぶ。是れが精神教育の趣味のある所であります。

ソコで尙ほ乃木大將の精神上のことを申しませう。乃木大將は吉田松陰、山鹿素行の學問をされましたが、是れが乃木大將の精神修養の淵源とも言ふべきであります。それでなか／＼堅い所がありました。學問上に於いてなか／＼堅い。山鹿素行や吉田松陰の事なら、なかなか熱心に研究された。其所にちやんと極つた據處があつたのであります。無關係の學問に對しては興味を抱いて居られなかつた。又精神に於いて山鹿素行及び吉田松陰の學問と一致するものがある。少くも幾らか似寄つたものがある。例へば水戸の學派の如きものがあります。三宅觀瀾、安積澹泊、藤田東湖などの書物を受讀されました。それから會澤正志齋の『下學通言』など、云ふ者を愛讀されました。是

れも私が活版の『下學通言』を持つて居りましたから、初めそれを見せました所が、版本も探し出されまして餘程よく研究されたのであります。水戸學派は精神に於いて山鹿素行、吉田松陰と一致する事が多い。ソコで云ふ學派の書物を研究された。其の外では熊澤蕃山に對して景慕の念を抱いて居られました。一昨年でありましたか古河で熊澤蕃山の御祭りをしました。其頃乃木大將はわざわざ彼處まで行かれました。さうして蕃山の墓に詣つて來たと云ふことを話して居られました。それからして又『大學或問』『集義和書』『集義外書』は見せたことがありました。けれども何等の批評をも爲されなかつたけれども、大分趣味を抱いて居られたことが分るのであります。それから山鹿素行の外には長沼澹齋に對して大分興味を抱かれた。是れは一度乃木大將は山鹿素行の兵學などを爲されるから、長沼澹齋の『兵要録』を探出して見せました。澹齋は有名な兵學者であります。所が段々之に對して興味を抱かれました。それから福島中將からして、長沼澹齋の遺著の寫本

で傳つて居るものを本箱一杯借りて來て研究された。是れだけあつたと言つてお見せになりましたが、私はそんなに澤山遺著のあることを知らなかつた。長沼澹齋は信州松本の人であります。まあさう云ふ事で一々思ひ出させぬが、只今思出したのはさう云ふ點であります。其の外人としては楠公を尊崇して居られた。事苟も楠公に關する以上は餘程研究された。楠公の遺著であると云ふやうなものがあつたと借りて來て研究して居られました。それから楠公に對しましては乃木大將の善い歌があります。斯う云ふのであります。

根も幹も枝ものこらず朽果てし

楠のかほりの高くもあるかな

斯う云ふ歌でありますから、乃木さんの場合にも當嵌まるかと思ひます。今になつて見ますと楠を野木に變へれば乃木さんに當嵌まるではないか。一家皆斷絶、後にかほりだけが遺つて居る。楠公と乃木大將とは餘程似た形跡がある。楠公は純忠の士である。其の點に於て

少しも疑ひはない。乃木大將も純忠に於いては少しも疑ひを挟む餘地がない。實に純忠無二の人であります。餘程楠公に似た所があります。楠公を尊崇されて居りましたが、楠公には本統の著述がないから研究しやうとしても何うも致方はない。それで本統に研究されたのは山鹿素行、吉田松陰であつた。儒教に對しては餘り熱心でなかつた。儒教は嫌ひでもないやうであつたけれども、やはり日本が好きであつた。何處迄も日本中心主義、帝室中心主義であつた。どうしても乃木大將には日本と云ふ事が頭にある。西洋の偉いことも言つて居られましたが、やはり何處の爲に盡すかと言へば日本の爲である。又日本の中心たる帝室の爲である。其の考に於ては少しも曇りが無かつたのであります。さうして大變名譽を大事と爲されました。虚名でない、事實に伴ふ名譽であると思ふ。或る時紙切れに書いて斯う云ふ歌を詠んだがどうかと言つて見せられました。それは

武士は玉も黄金も何かせん

命にかへて名こそ惜けれ

と云ふのであります。

デ乃木大將は詩もなか／＼上手であつた。詩は折々世に傳つて居るが、金州城外の詩だの凱旋の時の作だのなか／＼旨い。其の外まだ名吟が幾つかあります。又歌にも佳いのがあります。さうして書も謹嚴でなか／＼立派であります。それから文も書かれました。此所で山鹿素行の御贈位の御沙汰のありました時に大將が祭文を読まれました。あゝ云ふ風に立派な文章を書かれます。それから先刻乃木大將は演説は嫌ひであつたと申しました。所が演説は上手であつた。私は聴きましたから知つて居りますが、滅多に爲されぬ。諸君の中に乃木大將の公開演説を御聴きになつた方は恐くはなからうと思ふ。謙遜な御方であるから公開演説は滅多に爲されなかつたが、曾て大學で日本學會を催した時に英國少年隊のことを御話になりました。それは約一時間ばかりの講演でありましたが、非常に趣味多き講演であ

りました。其の時は大學の學生も大分來ましたが、乃木大將は英國少年隊の狀況を話し、次いで大陸各處に少年隊のあることを御話になりました。獨逸、露西亞其の他の國々に少年隊のあること及び其少年隊の有益なる事等をお話になりました。大いに學生を感動せしめられたのであります。講演は決して御出來にならぬのではない。なか／＼巧い。それから本年の五月頃のことであつた、學習院女學部に於て生徒一同に對して御講話をなされたさうであります。それは非常に能く出來たと云ふことであります。私は其の時居りませぬでしたが、後で聞きました。講演の筋が大變面白く出來て居る。非常に面白い講演であつた。決して演説が御出來にならぬのではない。やはり一つは謙遜である。それから嫌ひである。多勢の所に出て滔々と話すことは嫌であつた。まあ謙遜の意から來たのであらう。それでなか／＼詩も文も能くお出來になり、演説も決してお出來にならぬと云ふのではない。上手であつたと云ふことは我々の能く、知つて居る所であります。

ます。

それから乃木大將はまあ是れは私が申すまでもないことであります。すがなか／＼勤勉な方で、勵精と云ふことに付いては實に誰も感心するやうな方でありました。能く御務めになりました。例へば八時に授業が始まると云ふ時には八時より十分か十五分前には御出になる。固より軍人でありますから規律が正しい。さう云ふことは非常に嚴格でありました。それから又餘程剛健な所がありました。自分の意志は何處迄も貫徹して行くと云ふやうな餘程強固な所がありました。尋常で無かつた。それからして、又斯う云ふ點があります。乃木大將は非常に勇敢であり大膽であつたが、又非常に仁慈であつた。人に對して同情心が深かつた。それが武士の情けと云ふのでありませう。私かに聞く所では、随分大勢の人を惠まれたと云ふことであります。又屢、癡病院などを訪ふて慰められたと云ふことは誰も知つて居るが、日本ばかりでない、獨逸に於いても、奧太利に於いても癡兵を訪ふて金

品を贈られた。さう云ふやうに外國癡兵までも訪問して慰められたと云ふやうになか／＼能く行き渡つた所がある。それから交際の上、に於いて少しも偽りが無い。實に胸襟を開いて談笑なされて、少しも立て隔てがない。潔白な愉快な交際を爲された。併し其中に堅い所がある。谷本博士の批評とは正反對に僞善と云ふやうなことは痕跡だもない。誰が見ても分かる。大將を御存じの方は能く御承知でありませうが、實に此の點に付いては立派な稀なる方であつたと思ふのであります。

それで乃木大將の無くなられましたことは誰も非常に遺憾に思ふ。實に惜しむべきことでもあります。あの花々しき最後は乃木大將の満足せられる所であつたらうと思ふ。あゝ云ふ最後でなければ乃木大將たること能はずであります。乃木大將は平生どうも自分は空しく疊の上で死にはしまいかと云ふやうなことを心配して居られた。それは私ばかりでない、他の人も聞いて居ります。男子空しく死すべか

らずと云ふやうな考で居られた。唯、天恩の厚きが爲めに本務を盡すことに鞠躬盡瘁して居られた。其の爲に命を存らへて居られたが、何か適當の場合があれば君國の爲に捧げると云ふ平生の考が、山鹿素行や吉田松陰の考と能く一致して居る。山鹿素行の系統には壯烈なる事蹟を遺した人が随分ありますが、其の上に今又乃木大將を一人添へたのであります。此の系統の精神教育には何物か大いに學ぶべきものがある、と云ふことは、此の點から見ても分かるのである。さうして近代の青年などの大いに缺陷として居る所を丁度補ふやうな非常な剛健な精神的ものが存在して居る。此の學脈にさう云ふものゝあると云ふことは私の斷言し得る所であります。

デ乃木大將の自殺殉死を爲されたことに付いては色々説がありま

す、又自殺殊に殉死の可否と云ふことに付いては乃木大將と無關係ではないけれども、是れは又別に論じた方が宜い。〔中略〕

世間多くの自殺は極く愚な事から起ります。墮落の結果、失望落膽

して自殺せざるを得ずと云ふやうなことになる。それで世間の多くの自殺は非難すべきものがあるけれども、偉人傑士の能く計畫したる自殺はさうで無い場合がある。却つて客觀的に非常に善い結果を生ずる。乃木大將が生存して居られましたならば、まだなか／＼社會に有益なることを爲されたに相違ない。が遺言書にあるやうに六十四歳で、もう行先も餘り長くなく、國家の爲に餘り役に立ちさうもないからと云ふので自分で見切りを付けて自殺殉死を爲された結果は實に天地を震撼するの概があつた。さうして非常な感化を社會萬衆に與へられた。其の効果の偉大な所から考へれば、其の自殺は決して否とするには出來ないのである。毫も乃木大將の人格を傷ふやうな所はない。却つて乃木大將の人格をして一段の光彩を放たしむるの趣がある。尤も一體に自殺は善い、殉死は善いと云ふことは言へませぬけれども、乃木大將の場合に於いては實に立派な最後である。乃木大將が満足されるやうな花々しき武士の最後である。實は乃木大將の

平常の御考から言へば祝ひたい位である。併し斯う云ふ偉人を失つた所から言へば深く悲しまざるを得ない。私等の考へには此の兩方面がある。兎に角乃木大將の自殺殉死は此日本の武士道と云ふものゝ大いに力ある所を實際に示されたのである。今後尙ほ非常な効果を生ずることであらうと思ふ。自殺殉死に付いてはまだ色々論じたことがありますが、今日はその場所ではない。今日は山鹿素行先生の法會を營み、且つ乃木大將の追悼會を兼ねたのでありますから、山鹿素行先生と乃木大將の思想上の關係を略ぼ明にしまして、且つ乃木大將の人格の高潔でありましたこと、並に其の思想の果して那邊に存して居つたかと云ふこと、それから又乃木大將の自殺殉死の却つて社會風教上に非常な効果を生じたこと云ふ所から見れば、乃木大將の人格も是れが爲に毫も累はさるゝことは無いと云ふことを明かにしましたから是れで御免を蒙ります。(拍手) (大正元年九月二十六日宗委寺講演)

第四 山縣周南

山縣周南は周防の人である。十九歳の時初めて江戸に出て徂徠に會ひ、徂徠の門人となつて三年の間研究したのである。三年の後郷里に歸つて毛利侯に仕へ、屢、江戸にも出て來た。後に萩の明倫館の祭酒となつて大に彼の地方の文教を振興するに與つて力あつたのである。一體徂徠の門人にはなか／＼學才ある者が多人數有つたのである。併し其中で最も優れた者は太宰春臺である。學力識見等に於て春臺に及ぶ者はなかつたのである。殊に春臺は經學を主とした者であるから、何となく其學問に根柢がある。春臺の説は甚しく僻して居ることがあるけれども、學者としてはマア春臺を推さざるを得ない。併乍ら詩に於ては服部南郭を推さんければならぬ。南郭は兎に角文學の側に於て確に大家であるが、春臺南郭に亞ぐ者は何うしても周南であらうと思はれる。安藤東野、平野金華などは逆も周南に及ばないのである。

周南の好い處は、洵に穩健で、僻した處が見えない。どうも人が餘程好かつた様に見える。南郭も極く圭角のない和平の人であつた様に思はれるが、周南も、どちらかと云ふと南郭と稍似た性格の人の様に思はれる。周南の江戸に在る時斯う云ふことを聞いた。仁齋には帳中の秘書があつて、門人等は其れを見ることが出来ない。其帳中の秘書とは何かと云ふと、『吉齋漫錄』『斐記』『積記』など、いふ書物である。斯う云ふことであつたけれども、周南は其れを信じなかつた。後『吉齋漫錄』を得て讀んで大變面白く感じた。が、仁齋は決して『吉齋漫錄』を讀んで其説を竊んで主張して居るなんといふことは取らないのである。仁齋が若し『吉齋漫錄』を讀んで居つたならば必ず一言其事を言ふに相違ない。一言も其事を言はぬ所を見ると、仁齋は決して『吉齋漫錄』の説に本づいて古學を主張して居るとは考へられない。斯う云ふことを周南が云つて居る周南文集卷之九、其處から觀ると周南の穩和な又

公平な考の人であることが分る。徂徠學派は仁齋學派と云ふものを餘程敵視したやうな状態になつて居つた時である。其時に徂徠派の周南が仁齋の事をさう悪く解釋しないと云ふやうな點に於て周南の洵に立派な處が見える。

周南は『爲學初問』と云ふ書物を著して居る。此書物は世間で往々徂徠の著作として傳へられて居るが、それは全く間違ひである。是れは周南の著したものである。讀んで見ると、如何にも初學者のために著したものに相違ない。何か大に學說でも、述べて居るかと思へば、大してさういふ主張も見えない。大體隨筆體の教訓書と見ればよい。併乍ら書物の内容に依つて考へて見ても、如何にも周南が穩健でさうして度量の大きい様な處が察し得らるゝのである。時々徂徠派の癖も見えないではないけれども、決して春臺の様な甚しい僻説はない。

唯一つ『爲學初問』の中に於て學說の上から注意すべきことは、殆ど唯物論に似た様なことを主張して居る點である。左の如くに云つて居

る。

聖賢心法の教無し。形に長少あれば、心も連つて長少あり。形病めば、心も病む。形盡れば、心も盡く。氣血を離れて人に心あるにあらす。心は血氣の精靈なり。

と斯う云つて居る。是れは唯物論者の考である。斯様に明瞭に唯物論の趣意を言表したものは是れまで稀なる場合である。又『爲學初問』の中に、禮儀と云ふものを以て人と禽獸と異なる所以として居る。人間にも欲はある。欲はあるけれども、其欲を制するのは禮儀である。禮儀で以て欲を制して居る處に人間の禽獸と異なる處があると。斯う云ふ風に觀たので、人間と禽獸とを其本質に於て同じ様に視てさうして禮儀の極めて人間に取つて重要なことを示したのである。其事に就いてはいろ／＼『爲學初問』の中に論じてある。

それから『周南文集』が十卷程刊行されて今日まで傳へられて居る。此文集を讀んで見ると、やはり如何にも周南の性格が分かるのである。

又非常に徂徠を尊崇して居つたことも明である。周南は随分澤山文章も書いたのであるが、固より徂徠の様に偉い氣魄光燄ある文章ではない、古文辭の僻はあるけれども、大體明瞭なる文章を書いたのである。さうして又時々餘程佳い詩が出来て居る。例へば

一碧瑠璃凝不流。波光始白月盈樓。
笙歌忽入西風起。人住廣寒宮裏秋。

又『關山月』と云ふ題で

秋風俄入玉門關。月色如霜滿四山。
羌女不知征戍恨。吹笳一夜徹雲間。

殆ど唐人の詩を讀むやうである。又『東都送平子和之參州』の詩に云く、

休唱陽關三疊詞。陽關三疊不勝悲。

送君多馬河邊柳。折自南枝至北枝。

周南の門下にはなかく、人材が大勢出て居る。其中で學者として最も能く知られて居るのは瀧鶴臺と永富獨嘯庵である。獨嘯庵は大

阪に行つて醫を業として居つたのである。けれども決してたゞ醫者ばかりやつて居つた譯ではない。マア儒醫と云つて宜からう。彼は醫者の著述もして居るけれども『囊語』など、云つて大に道を論じた著述もある。彼の有名なる筑前の龜井南冥は曾て獨嘯庵の門に居つたのである。醫者になる積りであつたらう。けれども、獨嘯庵がもともと只の醫者でない。大に儒教の考があつたからして、それが南冥に影響して南冥は古學派の大家となつたのである。南冥の子に昭陽が出て更に大に古學を主張し、江戸に於て漸く古學の衰へるに當つて更に九州の一角より大に古學を主張して來たと云ふ様なことがあつて、其影響も多大である。此等の淵源を辿れば、周南與つて力ありである。それであるからして周南の學說として別に擧げて論ずる程のこともないけれども、併乍ら古文辭學派の中に於ては周南は決して注意を怠るべきでないのであるからして、茲に其概略を論じて置く次第である。

第五 市川鶴鳴

徂徠の門人に餘熊耳と云ふ者があつて、其餘熊耳の門下に種々なる人が居つたが、其一人は則ち市川鶴鳴である。是れは江戸の人であるが大阪に行つて徂徠の學說を唱へて居つたのである。後又江戸に立歸り、高崎侯に聘せられて儒官となつた。寛政七年七月に五十七歳を以て歿したのである。

鶴鳴は經學に長じて居つたやうであるが、茲に特に鶴鳴に就いて一言せざるを得ないことがある。明治四十五年の春の頃であつたと思ふ。ジャパンデレームに市川鶴鳴の事を長々と書いた人がある。それは日本に於てダーウソンの先に進化論を主張した人であると云つて論じたのである。其處には確か市川匡麻呂としてあつた様で、初め見た時に、どうも一向知らぬ人である。吾々がさういふ珍しい人の事を是迄氣付かずに居つたと云ふのは餘程意外であると感じて、

後で少し搜索して見た處がそれは市川鶴鳴の事であつた。鶴鳴は曾て『末賀能比連』と云ふ書物を著して大に本居宣長の說を反駁したことがある。鶴鳴は固い書物ばかり書いて居るけれども、唯、一つ『末賀能比連』と云ふ假名書の書物で殊に國學者の口吻に眞似て書いたものがある。本居の說が餘程氣障であつたと見えて、なか／＼鋭い辯駁をして居る。さうして此書物には市川鶴鳴とはない。初めの方に市川匡麻呂とある。鶴鳴の名が匡と云ふのであるから、假りに匡麻呂などとして論じたのであらう。此『末賀能比連』を通讀して見ると云ふと如何にも中には尤らしい事もある。本居が漢學の盛な時であるから、ひとく漢學を排斥して國學を持ち上ぐることを力めた爲めに幾らか議論に無理も出來て居る。さういふ處にちよい／＼と痛く觸れた様な點があつて、如何にもと頷かれる節もないではない。併し又随分間違つた議論をして居る處もある。

但し其等のことを茲で一々論ずる違はない、此書物の中に進化論め

いたことがあることはあるけれども、別に其れ程のこともない。唯、斯う云ふ事がある。

諸の國の遠つ祖も若し人ならずとせば必ず鳥獸の種なるべし。

と。鶴鳴は人間の先祖は神様どころぢやない、鳥獸であつたに相違ない、唯、聖人が出て其れに教を施して人間となつて鳥獸と區別されて來たのである、と斯う云ふ様な考であつた。又それだけのことで、何う云ふ具合にして人間が鳥獸から發達して來たかなど、云ふことはない。併し人間が鳥獸から出て來たなんと云ふことを大膽に云つた處は一寸注意すべきである。彼は人嶋と畜生嶋と云ふものを假定して、人間も教へがなければ畜生嶋に這入る、どちらにでも這入れる様なものである、唯、聖人の教を以てそれを實行して行けば人島の方に這入る、元は人島も畜生島もそんなにハッキリした區別はなかつたのである、人間も畜生島に居つたのである、それが聖人の教を得て人島の方に移つて來たのである、と斯う云ふことを頻に論じて居る。ダーウツンより前に

進化論を唱へたなんと云ふ程の偉いことはないけれども、併乍らジャバンデーレーメールには仰々敷紹介されたこともあるからして看過する譯にも行かないのである。

もう一つ此書物に於て注意すべきことは、人間の間には貴賤の別はないものであると云ふことを主張して居る。人間ばかりでなく人間以外のものに對しても本來貴賤の區別はないと、斯う云ふのである。彼は斯う云ふことを云つて居る。

凡て萬の物に貴賤の別は無ことなり。皆神の御魂の片破なれば貴賤の別あるべきかは。たとへば一種の米を飯に炊餅に舂酒に醸せしにおのゝ形も味も異なれども、いづれを貴び、いづれを賤まん。もと一種の米なれば別あるべき理なし。人は自貴しと思ふめれと鳥獸は人を敬ふ心しも見えず。況して人と人との上に奈何が貴賤の別あらん。されども道を以ていはゞ位と徳との二つこそ眞の貴き物なりけん。更に此二つを較れば位と云ふものも尊かめれど、徳

と云ものゝ尊きには及^シず。

斯様に云つて居る。更に進んで位と徳とを尙一層較べて

あるは高き位に生るゝ人も其位に合^カふ徳あらばこそ貴からめ。若し其徳なからましかば徳を懷^イる山^ヤ賤^クにも劣^トてまし。況して位は天より與^ユもし奪^ウましたまふ。身の内の寶は天も奪ふことあたはず、人も取ことあたはず。

と。さうして鶴鳴はやはり護園一派の系統を引いて、支那を標準として論ずる風があるからして、何となく徳ある者が位に即くのが自然である。位に在るものが徳なければ其位に留めて置くべきではないと云ふ様な支那風の考を以て我國を論せんとする傾向が見える。其邊に至ると素行一派の様に日本の國體を明にして出て來ないから議論に餘程弊がある。支那かぶれの護園一派の弊害の如何も略之に依つて知るべきである。又彼は他の處で云ふて居る。

元より人と物との間に自なる貴賤なく又人と人との上にも自なる

貴賤はなけれど人倫の教ありてより人嶋畜生嶋の境明に別たり。

と。さういふ様な考であるからして平等の考が彼れにあつた譯である。平等の考は陽明學派の人にもあつたが、鶴鳴の考には餘程明瞭に其れが表れて居る。兎に角是れは日本の思想の系統を辿るに當つて看過すべからざる點である。

天道福善禍淫。聖人之言。眞實無妄。互萬世而不爽。
如合符節。而世人多疑不信。不知分與時也。

物 徂 徠

補正の一

一二九頁

素行關係書類中に尙ほ左の書を加ふ、

津輕信政一卷外崎覺著

其他日本弘道叢記第三百三十三號乃至第三百三十四號に外崎氏の

山鹿素行の効驗説と津輕信政

と題せる一篇の文あり、亦併せて看るべし、

一六〇頁

哲學者カントが一生郷里以外に出てざりしことを述べて之れを仁齋
に比せり、然るにクローノー、フッセル氏カントの生涯を叙して曰く、

Kant ist beinahe achtzig geworden und hat seine Heimath = Provinz niemals,
seine Vaterstadt nur nothgedrungen für einige Jahre verlassen. (Geschicht der
neueren Philosophie, Bd. III. S. 40.)

此れに由りて之れを觀ればカントは郷州を出てざりしとは言ふべき

も郷里を出てざりしとは言ふべからざるなり、

二〇九頁

吳蘇原の語として

聖人定之、以中正仁義而主靜、

の句を擧げたれども、此句は周子太極圖說中の語にして、蘇原唯之れを引用せるのみ、

二四四頁

仁齋が愛を論ずるの旨意、頗る哥林多前書第十三章のそれと相似たり、

三一六頁

緒方維文の事、日本教育史資料卷十二の二六九頁に見ゆ、

三二一頁

仁齋門人として中村嘉種を追加せん、嘉種の事、日本教育史資料卷十二の二七五頁に見ゆ、

四〇八頁

陶山南濤の事、日本教育史資料卷十二の二七五頁に見ゆ、

四七五頁

論語徴の末書としては尙ほ論語徴要五卷寫本あり、此書は郡山の古屋永胤の著に係る、首めに永胤の序あり、弘化四年を以て撰ぶ所なり、終りに其子古屋友の跋あり、

四七六頁

徂徠集の末書としては尙ほ龜井昭陽の著二種あり、一は護文談二卷にして一は護文絮談二卷なり、

四八八頁

周易解は白重行の著はす所にして、間、徂徠の説を引用せるものなり、然れども程朱及び其他諸家の説をも擧げ、且つ自家の見解をも亦處々に挿入せり、重行大泉と號す、深く徂徠を慕ひ、此書を著はし、其遺訓に出づるものとなす、然れども其實蓋し附託に過ぎざるなり、序に云く、

我物夫子起于大東、成復古業、求之辭與事、而徵於古六經、大義始明矣、實

與七十子徒千歲而比肩不亦愈快乎余也從物子遺訓沈斯文既三十有餘年矣

重行の祖父徂徠に親炙し三世其學を傳ふといふ果して然らば其家學の系統は蕙園に出づ然りと雖も周易解の如きは寧ろ折衷の態度を取るものといふべきなり重行は莊内の人

五二三頁

徂徠が日本の地名を支那風にしたることに就いて先哲像傳卷一(第十)に原雙桂の説を擧げて云く

譯文筌蹄の題署などに武陵と書きたり左様の事甚だ非なり定めて東都は武藏の内にて武藏の武の字一字同じきによりて牽合し借り用ひて題署せしならん左あらば武陵の外にも武昌武清武平武進武宣武城武綠武定武邑武郷武涉武安武功武隆武寧武當武岡武康の類皆唐土の地名なれば手前物好次第に借り用ひてよろしからんや面々の物好次第に借り用ひば江戸に定まれる名はあるべからず左あ

良齋問話卷之下に東涯を評して云く

東崖は家學を守り朱子の學とは異なれども朱子集註及朱子文集などは能く讀みし人なり學問の博洽は本朝儒林の冠冕なるべし東涯が如何に良齋の眼に映せしかを知るべし

三七八頁

歴代官制沿革圖考一卷の左に左の説明を加ふ云く

此書は鍾伯敬の通鑑纂に載する所の王光魯の官制沿革圖を本とし之に明の官制を續補し末に文武教官勳爵の圖を附載す坊間に行はる所の版本は分ちて二卷となす

四〇八頁

陶山南濤の事日本詩史卷之三(第二十)に見ゆ参考すべし

四〇九頁

宮崎篤圃の事書乘要畧卷三に見ゆ

全上

木村鳳梧の事、日本詩史卷之五(第五十)に出づ。参考すべし。

四一〇頁

高養浩の號は、未だ詳ならずとせしが、後、其泉源なることを知れり。

全上

篠士明、松本達夫、及び荒川敬元を東涯門人中に加ふ。士明の事は、日本詩史卷之三(第三十)に見ゆ。参考すべし。達夫の事は、日本詩史卷之五(第五十)に見ゆ。敬元の事は、仁齋門人の處に詳なり。

四三〇頁

過庭紀談(卷數未詳)とせしが、後、其卷數五卷なることを知れり。

四六七頁

瀧鶴臺が服部南郭に與ふる書に、徂徠を評して左の如く言へり。云く、竊惟本邦文學、自惺窩羅山二老後、運屬昭融、大化日暉、乃有若闇齋、仁齋、東涯、錦里、白石、諸儒、皆能振起一方、陶鑄晚學、對揚國家、隆盛之治、及至吾徂徠先生、崛起乎表、東海爭高大、於芙蓉日出之光、與千秋白雪、映照寰宇、即

其從遊之士、熾扇風化、羽翼斯道者、乃若先生及東野春臺、金華周南、諸公、猶之風雲、應龍虎、實千歲一會、可謂極其盛矣也。

鶴臺初め周南に學び、後、南郭に學ぶ。彼れ發園の徒たるを以て徂徠を推尊すること殊に甚しとなす。

四七五頁

論語徴の末書中に尙ほ左の書を加ふ。

論語徴考二十卷 萩野鳩谷著

論語徴約辨解一卷 中根風河著

論語徴餘言 戸崎漢園著

論語徴解 森東郭著

四七六頁

徂徠集の末書には尙ほ左の書類あり。

徂徠集々話若干卷

徂徠文集注十卷 楠壽菴著

徂徠集考 大菅蘭澤著

四八九頁

徂徠が明律を解釋せるものとして偽書世に行はる。今尙ほ傳ふる所の明律考寫本五卷の如き、或は其一例ならんか

四九七頁

徂徠の和歌の事に就いて東洋學會雜誌第三編第二號に評論あり。參考すべし。

五二三頁

孔平珉文は萩野鳩谷の事なり。諸家著述目錄を看よ。

五五五頁

仁王經にも亦云く「唯佛與佛乃知此事。」

六六四頁

徂徠關係書類中に尙ほ左の書を加ふ。

徂徠先生文戒一卷 吉田孤山著

徂徠先生文淵詩源一卷全上

仁齋徂徠得失辨二卷 鈴木行義著

物徂徠真十卷 萩野鳩谷著

辨道辨名五卷全上

徂徠先生親類由緒書一卷寫本

百○事○決○定○と○注○意○を○肝○要○と○す○如○何○と○な○れ○ば○何○
 事○に○よ○ら○ず○百○事○決○定○と○注○意○と○に○よ○り○て○事○は○な○
 る○物○な○り○小○事○た○り○と○い○へ○ど○も○決○定○す○る○事○な○く○
 注○意○す○る○事○な○け○れ○ば○百○事○悉○く○破○る○

二宮尊徳

補正の二

三四頁

津輕耕道亦別に武治提要一卷上下二篇を著はし、武士道を論せり。此書久しく寫本にて傳はりしを始めて武士道叢書上卷に収載せり。

三八頁

鈴林卮言卷之十五に素行を論じて左の如く言へり。云く、
 山鹿氏韜鈴の盛名、今古其比を見ず。因つて自ら尊大にして、抑損謙讓の風を失せり。一大諸侯も、り砂をして招請す。山鹿これを受け、て恬然として敢て辭せず。終に公の尤を蒙りて、謫せらる。其咎誇大にありて、兵にあらす。云云。
 素行蚤に一見識を立て、世俗に阿諛せず。故に往々這箇の訾を受く亦必ずしも怪むに足らざるなり。

四六頁

武教全書の注解として武教全書抄廿四卷あり。福井中學校之を藏す。

武教全書解の著者は未だ詳ならずとせしが諸家著述目録を見るに、鈴木鐸の下に武教全書解とありて卷数を挙げず。蓋し同一の書ならん。

一三〇頁

素行關係書類中に尙ほ左の書を加ふ。

瀬田問答一卷

此書は温知叢書第六編に収載せり。

武事提要一卷 山鹿高恒編

鈴木扨言卷之十五

一三一頁

武士道に關する書類中に尙ほ左の書を加ふ。

竹馬抄一卷 斯波義將著

明君家訓一卷 室鳩巢著

武士訓五卷 井澤蟠龍著

武家須知一卷 蟹養齋著

武治提要一卷 津輕耕道著

武事提要一卷 山鹿高恒著

武學啓蒙一卷 力丸東山著

武教録一卷 全上

武經一卷 總生寬著

武士道叢書三卷 井上哲次郎有馬祐政共編

武士道家訓集一卷 有馬祐政秋山悟菴共編

武士道叢論一卷 秋山悟菴編纂

日本武士道史一卷 蛭川龍夫著

一四五頁

仁齋詩あり。云く、

遊學書生數百輩。隨行逐隊滿京師。衆中元有口豪傑。打破乾坤不可知。

一七四頁

四
邨冬嶺は即ち村上冬嶺の事、詳に近世叢語卷三(第四)に出づ。

三一頁

荒川蘭室の事、日本詩史卷之五(第五)に出づ。東涯門人とせり。初め仁齋に就いて學び、後、東涯の門人たりしか。

三一三頁

瀨尾維賢の事、日本詩史卷之三(第八)に出づ。訪江山人の詩あり。云く、

一路斷橋外、孤村杏靄中、柳垂前夜雨、花落暮春風、白屋經年漏、

青山與昔同、浮生須痛飲、淺水月朦朧、

三一七頁

鳩巢、伊東儀の碑銘を作る。後編鳩巢文集卷之十七に見ゆ。

三二四頁

仁齋關係書類中に左の書を加ふ。

蕤蕪辨鈴 木正義著

三六一頁

らば亂名にあらずや、云云、

此言能く徂徠が用語の弊に適中せりといふべし。

六七頁

釋大潮と成島錦江との間に僧明月を挿入せん、明月名は明逸、字は曇寧、周防の人、真宗の僧にして、護國の學を喜ぶ、其事蹟は詳に日本教育史資料卷十二の二二八頁に見ゆ。

六七九頁

岡野石城と野田石陽との間に富田大鳳を挿入せん、大鳳、字は伯圖、大淵と稱し、日岳と號す、人となり、慷慨氣節あり、常に王室恢復を以て已れが任とせり、享和三年を以て歿す、享年四十二、著はす所日岳文集十五卷(本)あり、小橋某撰ぶ所の富田大鳳傳に言へるあり、云く、

自先世素好物茂卿之學、至大鳳加崇信、然如茂卿味於王霸、相爲霄壤、極口辯斥之、不敢假也、

此れに由りて以て其人物性行を知るべきなり、其事蹟は肥後先哲事蹟

孔。釋。之。教。拯。溺。救。焚。向。微。二。聖。人。
禽。曷。分。歐。洲。哲。學。尤。推。瑣。韓。知。大。
宗。師。固。道。德。根。弱。肉。強。食。今。尙。未。
已。卓。美。之。世。何。時。可。待。炳。燭。餘。光。
嗟。我。老。矣。繼。往。開。來。望。在。俊。士。

中村敬宇

補正の三

一六五頁

孟子古義解題の末に下の如き文を加ふ。伊藤東涯(孟子古義寫本)一卷を作る。

三三三頁

伊藤東所の著述中詩解十八卷、古義堂遺書總目叙釋一卷を加ふ。

三七六頁

伊藤東涯の著書中經說(寫本)一卷を加ふ。

四〇八頁

穂積能改齋は播州の人としたれども、著書には攝江とあり。或は攝津の人にあらざるか、疑を存す。

四七五頁

論語徵解題の末に下の如き文を加ふ。又郡山の古屋永胤、論語徵を以て論語本文の註脚と爲し、論語徵學要五卷寫本を著はせり。序文の末

に、弘化四年丁未秋七月朔とあり。

四九頁

徂徠著書の末に論語辯に付いて一言辯明するの必要あり。論語辯は古來徂徠の著書とすれども、徂徠に元と此の如き著書なきのみならず、其内容の膚淺なる、一見して其徂徠の作にあらざるを知るに足る。明治年間に至り、文學士祥雲確悟、校訂して之を刊行す。是れ特に茲に辯明する必要ある所以なり。

六六二頁

徂徠關係書類中に徂徠先生親類並由緒書一卷、家傳史料卷二、收載を加ふ。

六八六頁

春臺著はす所の書類中周易反正十二卷、易道撥亂一卷、詩書古傳三十四卷、老子特解二卷、産語二卷、和讀要領三卷、經濟錄十二卷を加ふ。

六九〇頁

春臺の事に就いては、尙ほ文會雜記(二六)を参考せよ。

明治三十五年九月五日印
明治三十五年九月八日發行
大正四年九月十七日訂正増補印刷
大正四年九月二十日訂正増補發行

日本古學派之哲學史附

定價金貳圓也

著述者 井上哲次郎

發行者 東京市神田區裏神保町九番地 富山房

代表者 同 町合資會社富山房社長 坂本嘉治馬

印刷者 東京市牛込區榎町七番地 渡邊八太郎

印刷所 東京市牛込區榎町七番地 日清印刷株式會社



發兌元

東京神田

合資會社 富山房

電話長本局一〇三六番 振替口座五〇一番 電報略號ヤマフ

談—宗教の本體に就いて—宗教及び之れに對する日本人の位置—
青年の宗教に對すべき態度—青年に必要な信念—公德と私徳—
道徳及び宗教に就いて—教育雜感—佐々木弘綱翁の十年祭に際し
所感を述ぶ—現今の教育問題—日本社會目下の病弊—東西洋倫理
思想の異同—教育上に於ける黨派心の弊害—言文一致に就いて—
裸體畫論—法律と道徳との關係—日本現今の新聞を評す、

增訂勅語衍義第三十二版 一册 定價四十錢

教育と宗教の衝突第四版 一册 定價三十錢

菅公小傳 一册 定價三十五錢

目次—叙論—菅公の祖先—菅公の時代—菅公の事蹟—菅公の夫人
及び子孫—菅公の著述—文藻—學問及び技藝—史的評論—菅公關
係書類

菅公事蹟 一册 定價十五錢

武士道 一册 定價五錢

巽軒詩鈔木版 二册 定價四十錢

釋迦種族論 一册 定價四十錢

日本陽明學派之哲學九版 一册 定價壹圓四十錢

目次—叙論—第一篇中江藤樹及び藤樹學派—中江藤樹—熊澤蕃山
—第二篇藤樹蕃山以後の陽明學派—北島雪山—三重松菴—三宅石
庵—三輪執齋—川田雄琴—中根東里—林子平—佐藤一齋—梁川星
巖—第三篇大鹽中齋及び中齋學派—大鹽中齋—宇津木靜區—林良
齋—第四篇中齋以後の陽明學派—吉村秋陽—山田方谷—横井小楠
—奥宮槿齋—佐久間象山—春日潛庵—池田草庵—柳澤芝陵—西郷
南洲—吉田松陰—東澤瀉—真木保臣—鍋島閑叟等—結論—附錄一陽
明學派系統—附錄二、陽明學派生卒年表

日本古學派之哲學六版 一册 定價壹圓六十錢

目次—叙論—第一篇山鹿素行—第二篇伊藤仁齋及び仁齋學派—伊藤仁齋—中江岷山—伊藤東涯—並河天民—原雙桂—原東岳—第三篇物徂徠及び徂徠學派—物徂徠—太宣春臺—結論—附錄一、堀河學派系統—附錄二、護國學派系統—附三、古學派生卒年表

合著書類目錄

哲學字彙 一册 定價壹圓
倫理教科書 五册 定價壹圓卅錢

編輯書類目錄

哲學叢書

第一卷第一集

目次—緒言(文學博士井上哲次郎)—倫理法の必然的基礎—(文學士吉田熊次)—實行倫理と宗教文學士紀平正美—哲學評論(文學博士

井上哲次郎)—新刊批評(同上)

第一卷第二集

目次—認識と實在との關係(文學博士井上哲次郎)ロツチエの哲學(文學士西晋一郎)哲學評論(文學博士井上哲次郎)—同上(文學士野田義夫)新刊批評(同上)

第一卷第三集

目次—哲學の科學及び宗教に對する關係(文學士虎石惠實)—認識と實踐、實在觀念と理想觀念(文學士森内政昌)二程子の哲學(文學士宇野哲人)—哲學評論(文學博士井上哲次郎)—同上(文學士野田義夫)新刊批評(文學博士井上哲次郎)

日本倫理彙編

十册 內六册既刊

關係書類目錄

井上博士講論集第一編 佐村八郎編纂 定價二十錢

目次—人種言語及び宗教等の比較に依りて日本人の位置を論ず—
東西文化の差異を論ず

六

同第二編 同上

目次—歐洲哲學の近況—王陽明の學を論ず—大鹽平八郎の哲學を
論ず—文學と教育の關係—國民英學會に於て—教育上に於ける迷
信の害

勅語衍義考證 三石寅吉編次

定價三十錢

井上博士と基督教徒 關阜作編輯 一冊

定價二十八錢

同續編 一冊

定價二十八錢

同收結編 一冊

定價三十五錢

巽軒宗教論批評集 秋山悟庵編輯

近刊

73
187

終